別府市史にとってのプランゲ文庫

白土康代

はじめに

温泉の町である別府[i]は、戦争中は、温泉医療基地として多くの傷病兵を受け入れていた。病院からあふれた患者が市内の各旅館に収容され、特殊飲食街までも「病室」となったことはよく知られている。終戦直後の九月二六日、別府港は早くも復員船である高砂丸を迎えた。そうしたことからも分るように、空襲を受けなかった別府には、狭い町に大勢の引揚者[ii]や復員兵、傷病兵、戦災孤児があふれかえった。さらに昭和二一年（一九四六）一二月には進駐軍の基地が建設された。主として将校や下士官の宿舎などに使用するために、多くの旅館やホテル、さらに民間の住宅までもが接収されたこともあり、一時流入ストップがかけられるほどに人口過密となった。被生活保護者が一八人に一人という驚くべき数字もある。にもかかわらず酒税の納入額が県下一となるなど、占領期[iii]の別府は消費都市として、ある意味で「繁栄」し、にぎわっていたといえる。地元紙が「複雑怪奇な町[iv]」と表現したのも不思議ではない。当時の大分合同新聞には「別府なれば」「困った事件　別府なりゃこそ」「別府は冥土の一里塚」といった見出しや、「食と金の別天地」「別府の闇景気」といった別府の「複雑怪奇性」を示す見出しが散見する。

現在にいたる観光都市としての別府の性格を決定づけた別府国際観光文化都市建設法が制定されたのも占領期の昭和二五年（一九五〇）七月である。大正から昭和初期にかけて様々な観光施設が開発され、観光都市としての別府の土台ができたことは周知のことであるが、住民投票において圧倒的な賛成を得て制定された別府にのみ適用されるこの法律は、別府が日本のみでなく、世界を視野に入れた観光都市として、戦後の混乱から出発することを目指していた。

占領期の別府は、ある意味で特殊でもあり、しかし同時にたとえば別府の戦後について「占領軍が政治を変え、経済を支えた」（小郷、一九九五）という指摘もあるように、進駐軍の存在によって経済的に潤い、「繁栄」したという意味において、米国との緊密な関係によって経済発展を遂げた戦後の日本の姿に通底する普遍性をもっているともいえる。有史

以来、日本にとって初めての占領体験は六年半続いたが、別府から進駐軍が撤退したのはその五年後である。占領期の別府をその時間的枠組みの中でとらえ直してみることも意味のあることだと感じている。

占領期の別府の実態を解明し、占領体験がその後の別府の歩み、庶民の生活や文化活動、観光行政や経済などに与えた影響を検証することは、戦後六五年が経過した現在の別府の抱える問題を考えるためにも意義のあることである。

本稿の目的は、占領期の別府に光をあてるための史料としてのプランゲ文庫の意義を検証すること、およびその利用方法を紹介することである。

まずプランゲ文庫について述べる。

プランゲ文庫について

① プランゲ文庫誕生の経緯

昭和二〇年（一九四五）八月一五日、終戦を迎えたのち進駐してきた連合軍最高司令官総司令部ＧＨＱ／ＳＣＡＰ[v]は民主化政策を進める一方で、その民主化政策とは矛盾する徹底した言論統制を行った。九月には一〇箇条からなるプレスコードを出し、郵便、新聞、電話、電報、映画、放送、出版といったあらゆるメディアに対して検閲を始めたのである。出版物についていえば、著名な学者や作家の著したものだけではなく、ジャンルや発行部数などとは無関係に、中央の大手の出版社の雑誌や書籍はもとより、地方の高校生の同人誌、社内報、青年団団報といった草の根レベルの文集、短歌誌、趣味誌、絵本、地図、映画のパンフレットから楽譜まで文字通りあらゆる種類の出版物が対象となった。たとえば臼杵市では当時一五、六才だと思われる若者が出した、わずか一〇部発行のガリ版刷りの雑誌『薫風』も検閲を受けている。

とはいえ、占領期に出されたが、プランゲ文庫に収蔵されていないものもある。たとえば終戦直後の大分市で出された『碧蹄』『言語革命』また天皇制を批判する詩を掲載した『自由文化』の三種類の雑誌はプランゲ文庫には収蔵されていない。昭和二〇年（一九四五）一〇月に刊行された『自由文化』は、軍の払い下げの紙一万枚を退職金代わりに受け取った陸軍報道記者であった是永勉が刊行した雑誌である。用紙を自前で用意できたということが、紙の配給とセットになっていた検閲制度の網の目をかいくぐったのである。このように敗戦後の混乱期に、それでも突然に訪れた言論の自由を享受し

て出版され、タイトルのみはかろうじて記録されてはいるものの、時の経過とともに失われていった雑誌は少なくはない。その一方で、検閲を受けたために、六〇数年後インターネットを活用すれば、遠くアメリカの図書館にその存在を確認し、読むことができる膨大な量の出版物がある。プランゲ文庫が負の遺産であるといわれる所以である。プランゲ文庫を活用すれば、時間と空間を瞬時に越えかつ結ぶことができるのである。

G2（参謀第二部）に属したCCD（民間検閲部隊）はゲラ刷りを二部提出させ、検閲実施後、一部を出版社に返却し、もう一部はCCDに保管した。日本全国が三つの地域に分割されたが、大分県は福岡第三検閲局（福岡市橋口町松屋ビル第三地区検閲局）の管轄であった。郵送による提出が行われたが、大分軍政局[vi]に直接持参する場合もあったという[vii]。

最初は事前検閲であったが、極左極右の出版物の一部を除いて、昭和二二年（一九四七）一〇月一五日より事後検閲に移り、昭和二四年（一九四九）一〇月に検閲は終了した。CCDには日本中から集められた膨大な量の紙の山が残された。この紙の山こそのちに「プランゲ文庫」と呼ばれるものであるが、当時は単に「占領軍資料」と呼ばれた。

この「占領軍資料」には、検閲のために日本中から集められた出版物とそのゲラ刷りのみでなく、出版届けや、英文とその翻訳文からなる検閲文書などもふくまれている。例えば別府で出された『大分春秋』の編集発行人である前田三七男が、原爆関連の記事を掲載したことや翻訳権のことで厳重注意を受け、東京のCCDに呼び出された時に書いた弁明の手紙などを読むことができる。自社の名前を印字した原稿用紙に達筆な筆で書かれている[viii]。

一一月にCCDが廃止されるに際し、この「占領軍資料」の処理が問題となった。そのときGHQの歴史資料室に勤務していたプランゲ博士[ix]が、歴史家としての慧眼から、この「占領軍資料」の価値に着目し、勤務していた米国メリーランド州立大学に譲渡されるように働きかけた。

持ち帰るにあたっては様々な課題もあったが、博士の粘り強い努力により、一九五〇年から五二年にかけて五〇〇余もの箱に入れられて船積みされ、のちにプランゲ文庫となる「占領軍資料」はメリーランド州立大学に到着した。

人手、資金不足などからそのまま一〇年近くの間、大学のマッケルディン図書館[x]の地下におかれたままになっていた資料の山は、少しずつ多くの人々の努力によって整理が行わ

れ、一九七八年に大学の正式なコレクションとなり、「ゴードン・W・プランゲ文庫 ―一九四五 ―一九四九年日本における連合軍の占領資料」と名付けられた。「プランゲ文庫」の誕生である。

雑誌一三、八〇〇タイトル、新聞一八、〇四七タイトル、図書・パンフレット約七三、〇〇〇タイトル、報道写真約一〇、〇〇〇枚、地図約六四〇枚、ポスター九〇枚、その他英文の検閲資料なども含まれている。

大分県の雑誌は一一〇タイトル収蔵されており、うち別府でだされたものは表Ⅰに示した二五タイトルである。また新聞は大分県全体では二六六タイトル収蔵されており、発行量は日本全体の一・四%をしめ、全国二〇位となっている。（中司、五〇頁）別府でだされたものは表Ⅱに示したように五二タイトルである。当時の別府の特異性をほうふつとさせる「ニュー映画タイムス」「Dance」「霊界通信」あるいは「占宣新聞」などが含まれている。整理は現在まだ続いている。別府で出された俳句誌『大由布』は最初の目録に補遺が追加された。

② 現状　保存とアクセス

目録作業は一九六〇年代から行われてはいたが、日米が協力し、本格的な目録作業が始まったのは、一九九二年からである。現在でもまだ続いている。

しかし目録作業が進む過程で、大きな問題が生じた。保存の問題である。戦後は用紙の極端な不足から仙花紙と呼ばれた質の悪い酸性紙が使用されることが多く、時の経過とともに質の劣化が加速度的にすすんでいたからである。そのためメリーランド大学は一九九二年、日本の国立国会図書館と共同で雑誌保存共同事業を開始し、雑誌類のマイクロ化に取り組む。一九九三年には新聞と関連文書のマイクロ化も開始した。完成したマイクロ資料は販売され、日本国内では、国立国会図書館また、早稲田大学をはじめとするいくつかの大学がコンプリートで所蔵している。また多くの県立図書館はその県で出された雑誌類のマイクロ版を所蔵している。大分県立図書館にも大分県で出された一一〇タイトルの雑誌のマイクロ版が収められている。地域資料室で読むことができる。

またプランゲ文庫に収蔵されている約八〇〇〇冊の児童図書はカラーマイクフィルム化された。さらにその内の一六〇〇冊についてはデジタル化が行われ、「プランゲ文庫

児童図書デジタルコレクション」として、書誌事項とカラフルな表紙の画像をネット上で見ることができる。（http://www.lib.umd.edu/digital/prange.jsp）

雑誌と新聞については以下の書誌目録が完成している。すなわち『メリーランド大学図書館所蔵ゴードン・W・プランゲ文庫雑誌目録』一～三巻二〇〇一年、『メリーランド大学図書館所蔵ゴードン・W・プランゲ文庫新聞目録』一～三巻二〇〇五年である。いずれも一巻と二巻はＡＢＣ順、三巻は都道府県別、分野別に検索できる。残念ながらこれらの書誌目録は大分県立図書館には収蔵されていない。しかしメリーランド大学および国立国会図書館のＯＰＡＣ^{x}を使えば、プランゲ文庫収蔵の出版物のタイトル、著者、編者、出版地、出版者、検閲の有無による検索ができる。

教育関連の書籍目録については希望者への無料配布が行われている。申込書をメリーランド大学のＨＰで入手し、ファックス、郵送、Emailで申しこめば入手できる。（http://www.lib.umd.edu/prange/html/Education_JPN.pdf）

また占領期メディアデータベース化プロジェクト委員会が作成した「占領期新聞・雑誌記事情報データベース」を利用すれば、執筆者、雑誌タイトル、記事タイトル、小見出しタイトル、編者、出版者で検索ができる。極めて便利な検索ツールである。ネット上で公開され、だれでも無料で使うことができる。（http://m20thdb.jp/）

たとえば記事タイトルの欄に「別府、旅」と入力すると、六五件ヒットする。その中の一つ「別府修学旅行記」の書誌情報を見ると、この修学旅行は昭和二二年三月二五日広島県立呉第二高等女学校校友会が発行した『緑ヶ丘』という雑誌の一〇頁から一一頁にかけて掲載されていることが分かる。最寄りの図書館を通して国立国会図書館から複写を取り寄せ、読むことができる。

「別府修学旅行記」には昭和二一年の修学旅行の様子が描かれていた。「焼け跡ばかり見続けた目に爆撃に見舞われない」別府がひときわ美しく感じられたことをつづる女学生の他愛ない作文にも検閲の目が光り、鉛筆で黒く塗りつぶされている箇所があった。添付されている英語の文書と合わせて読むと、「ここは鶴見公園として使われていたが、現在は占領軍の兵舎となっており、入口は立ち入り禁止になっている」と書かれていた。削除理由はプレスコード四条違反「社会的な不安を煽る」である。

先述したように、大分県で出された雑誌一一〇タイトルについては大分県立図書館にマイクロ版が収蔵されている。借り出して、館内のマイクロリーダー器で自由に読むことができる。器械が旧く非常に読みにくいが、一枚一〇円で複写もできる。

現在、この委員会は、たとえば「欠食児童」、共産党の支部組織を意味する「細胞」といった、占領期には盛んに使われたものの、現在ではちがう意味で使用されることのある語彙の検索を可能にするために、シソーラス辞典の作成に取り組んでいる。完成すれば、記事タイトルからのアクセスが飛躍的に便利になると思われる。

史料としてのプランゲ文庫

プランゲ文庫は検閲によって生まれたものであることから、占領期にアメリカが行った検閲制度やメディア史の研究資料としてとらえられることが多かった[xii]。

しかし、検閲の対象があらゆる出版物、すなわち、一般的には時間とともに失われてしまうと思われる、たとえば職場で出された文芸誌、高校生が仲間と出した文集や青年団のガリ版刷りの手作りのミニコミ誌など多岐にわたっていることから、プランゲ文庫はまた地方史、とりわけ地域文化を物語る貴重な史料ともなっていることを強調しておきたい。市史について言えば、横浜市、茅ケ崎市など自治体よる市史編纂にプランゲ文庫の調査研究の結果がとりいれられ始めている。それまで自分の考えや思いを文章に著すことのほとんどなかった人々が、敗戦により突然に与えられた言論の自由を享受し、挫折と混乱と希望のないまぜになった時代への思いをぶつけた手作りの雑誌が、プランゲ文庫にはあふれているからである。行政などが出したいわば正史の記録からは、聞こえてこない声が聞こえてくるのである。西中浦村（現在の佐伯市）の有明青年団が出した『あけぼの』の編集長阿部金利氏によると、原稿は「集めて回る必要がなかった。鮪浦、帆波浦の団員たちは山道を歩いて持ってきた」という。

プランゲ文庫収蔵誌の多くは、昭和二三年（一九四八）にできたばかりの納本制度がまだ十分機能していなかったこともあって、国立国会図書館はもとより、地元の図書館の地域史料室にも、大学の図書館などにもほとんど所蔵されていない。このこともプランゲ文庫に地域史の史料としての価値を

賦与しているということも付け加えておきたい。

たとえば戦前戦後にかけて別府で内藤凡流の指導した別府番傘川柳会が出した『川柳文化』は、国立国会図書館にも、大分県立図書館にも別府市立図書館にさえ収蔵されていない。一方プランゲ文庫には残念ながら創刊号こそ収蔵されていないが、昭和二一年四月に出された『川柳文化』の一巻二号から、四巻八号通巻四〇号までが入っている。その中には占領下の別府の実相を映すいくつのも作品を読むことができる。他の雑誌からは検閲により追い出された「パンパン」という語彙や、米軍兵士の姿やジープが川柳ならではの切り口で立ち現れる。

占領期の別府の川流文化を再評価できる貴重な資料が、地元の図書館ではなく、遠く米国メリーランド大学ホーンベイク図書館にあるアジア資料室のプランゲ文庫の中にあるのは皮肉であるが、別府市史にとっては稀有なめぐり合わせである。史料として活用すれば、占領期の「複雑怪奇」な別府の姿を解明する手掛かりとなると思われる。

別府に限らず、大分県の占領期の文化についての調査研究はいまだに明らかにされていない。「終戦後の虚脱の中に本県の文学活動は、同人誌、青年団のガリ版刷り雑誌に芽生えた。それはやくざしばいや流行歌と同じように、ただ若い人々の情熱をたぎらせるものと、戦争中にこっそりやっていた短歌、俳句のグループが趣味的な集まりで発表機関を作り出したという二つの流れを見せていた。が、その実態はいまだに明らかにされていない」（大分県、一九九一、三八〇頁）また「県下の職場文芸誌の実態把握は、残された問題である」（大分県、一九九一、四〇二頁）さらに「GHQの検閲は影響力の大きい全国紙や東京の大新聞、著名出版社の出版物に対して特に厳しかったようだが、地方紙、小雑誌もまたその埒外にあったわけではない。もっとも大分県下の新聞に対する検閲の実態は、いまだに明らかにされていない」（大分県、一九九〇、四一頁）という指摘が示すように、史料となるはずの多くの出版物の実態そのものがいまだにあきらかにされていないのである。『別府史談会』においても占領期への関心は高いとはいえない。それは、活用できる史料が希薄であることも理由の一つであると思える。

しかし先述したように、「占領期新聞・雑誌記事情報データベース」を活用すれば、雑誌内の記事タイトルや執筆者の名前による検索が可能である。著名作家だけではなく、市井の人の名前も検索すればでてくるからである。個人名をここ

にあげることは控えるが、別府の朝見地区、山田地区、楠町の青年団がだした雑誌には現在七〇歳代後半以上の方が青年期に書いた記事がいくつも見つかっている。それらを読めば、『大分県史』が「いまだに明らかにされていない」と述べた史料的な空白記である占領期の人々の草の根の声を聞くことができる。

有史以来日本が一度も経験しなかった占領体験は、現在の日本の政治、経済、社会、文化の原点となっている。六五年が経過し、混迷する日本が抱えるさまざまな課題を検証するには、戦後の出発点となった占領期に返り、当時の人々の思いを見詰めなおし、系譜学的な遡及により、その時点で存在した多くの可能性を再検証する必要があるのではないか。

別府という町が体験した他の町とは違う占領体験も、そういう視点から見つめなおせば、未来につながる新しい展望をもつことができるはずである。現在行われているさまざまな町づくりのためのプロジェクトも、そうした歴史を担った町としての別府という視点をもてばさらに深い思いのこもったものになるのではないだろうか。

地域の草の根の活動をとらえることのできるプランゲ文庫は別府市史にとって貴重な史料であると言える。

表Ⅰ　別府で出版された雑誌

http://www.bunsei.co.jp/prange/ に基づき作成

タイトル	発行者	巻次・年月日	編集者
愛	万寿会	1号(1949年7月)	大橋　秀信
別府春秋	別府春秋社	4巻2号通刊15号(1949年2月) ～4巻5号通刊19号(1949年9月)	久保山　勝
ちんぜい	鎮西文化同好会	1号4巻(1947年10月) ～1号6巻(1947年12月)	鎮西文化同好会
第三医学	第三医学研究協会	2巻2号[通号]5号(1949年3月) ～2巻3・4号[通号]6・7号(1949年7月)	河内　省一
大由布	大由布発行所	4巻6号(1949年6月) ～4巻9号(1949年9月)	岡嶋　　坦
ゴーストップ	ゴー・ストップ社	1号(1947年10月)	前田三七男
群星	別府連合軍住宅電話局	1巻1号(1949年4月) ～1巻3号(1949年8月)	松本　孝一

ほゝえみ	別府市北町青年会文化部	3号(1948年5月) ～4号(1949年2月)	別府市北町青年会文化部
奔流	全日通労働組合別府支部書記室文芸部	1号(1946年12月)	伊串　直
鶴嶺	別府第一高等学校校友会	22号(1946年12月) ～25号(1949年3月)	吉野　雅雄
景勝の九州	景勝の九州社	1号(1949年3月)	大野　倉蔵
くすのき	楠町青年団	1号([1946年11月]) ～2号(1947年4月)	礒沖　展喜 白石　静子 若杉　光夫 脇屋　秀雄
九州大学温泉治療学研究所研究彙報	九州大学温泉治療学研究所	1巻3号(1948年10月)	石川　学 田中　長徳
松葉杖	青年団鉄輪支部文化部	1巻2号(1946年7月) ～2巻1号通巻3号(1947年2月)	原　草思
オアシス	国立亀川病院療友会文化部	1巻1号(1947年8月) ～2巻6号(1948年9月)	村瀬　直登 若松　義雄 山内　清澄
大分県の協同組合	協同組合経営研究会	1巻5号通巻1号(1949年5月) ～1巻7号通巻3号(1949年7月)	松岡　実
大分春秋	大分春秋社	1巻1号(1946年12月) ～1巻5号(1947年10月)	前田三七男
Our friend	山田青年会	1巻1号(1948年5月) ～1巻2号(1948年6月)	本田　馨
川柳文化	別府番傘川柳会	1巻2号[通巻]2号(1946年4月) ～4巻8号通巻40号(1949年9月)	斎藤　清幸
紫苑	紫苑社	39号(1949年7月) ～40号(1949年8月)	小池　親鑑
朱竹	朱竹短歌会	2巻9号(1948年9月) ～3巻9号(1949年9月)	朱竹短歌会
八雲	八雲短歌会	8巻11号通巻79号(1948年12月) ～9巻9号通巻88号(1949年9月)	田吹　繁子
友情	友情文苑	1号(1948年1月) ～9号(1948年9月)	深見　ヨネ
ゆけむり	ゆけむり同人社	1号([1947年]?月) ～7号(1948年2月)	原　草思
夢	Dream編輯部	復刊号(1948年3月)	下村阿紀良

表Ⅱ　別府で出版された新聞

http://www.bunsei.co.jp/prange/ に基づき作成

基本標題	出版者
赤い湯けむり	日本共産党亀川細胞
暁時報	杉山武雄
別府女専新聞	別府女子専門学校
別府青年新聞	別府青年団連合会
別府新聞	別府新聞社
別府市政便り	別府市役所
別府タイムス	別府タイムス社
Beppu weekly	ベップウイクリー社
別占宣	別府占領軍要員労働組合
豊後新聞	豊後新聞社
Dance	夕刊サンデー社
衛生新聞	衛生新聞社
豊州新聞	豊州新聞社
公民館報	別府市公民館
協生新聞	大分県海外引揚者団体連盟
九州朝日新聞	九州朝日新聞社
九州観光タイムス	九州観光タイムス社
九州建設新聞	九州建設新聞社
九州工業新聞	九州工業新聞社
九州毎日新聞	九州毎日新聞社
九州民報	九州民報社
九州民友新聞	九州民友新聞社
九州新聞	株式会社九州新聞社
九州探偵新聞	九州探偵新聞社
万寿会ニュース	別府市北町万寿会事務局

民主新聞	民主新聞社
日本公声新聞	日本公声新聞社
日刊別府	日刊別府新聞社
日豊タイムス	日豊タイムス社
西日本医界	西日本医界社
西日本実業新聞	西日本実業新聞社
西日本商工新聞	西日本商工新聞社
ニュー映画タイムス	ニュー映画タイムス社
大分時報	大分時報社
大分県社会教育弘報	社会教育研究会
大分民報	大分民報社
大分日日新聞	大分日日新聞社
大分産業新聞	大分産業新聞社
大分新聞	株式会社大分新聞社
霊界通信	霊界通信社
産業新聞	産業新聞社
S.C.A. weekly	自励社
泉都べっぷ	泉都べっぷ新聞社
新別府	新別府新聞社
商業タイムズ	商業タイムズ社
よなほり	よなほり会
世論大分	大分世論研究所
夕刊サンデー	夕刊サンデー社
全農県連報	全国農民組合大分県連合会
西日本観光ニュース	西日本観光ニュース
大分報知	大分報知新聞社
大分民主新報	大分民主新報社

i 本稿においては行政的枠組みでとらえた時もそれ以外の時もたんに別府としている。市町村合併により市勢が変化しているが、煩瑣になることを避けるために、当時の臼杵町で出された雑誌について言及する場合などは、臼杵市としている。

ii 昭和二一年（一九四六）三月にはGHQにより別府に引揚援護局を設営するようにとの指令がだされた。しかしなぜかわずか三日で名古屋に変更になっている。

iii 一般的には昭和二〇年（一九四五）八月一五日、法的にはミズリー号上で降伏文書への調印を行った九月二日からサンフランシスコ講和条約が発効した昭和二七年（一九五二）四月二八日までの六年半にわたる時期を占領期と呼ぶ。しかし別府の占領期については、進駐軍基地キャンプ・チッカマウガから星条旗が下された昭和三二年（一九五七）三月までの約一二年間を別府の占領期と呼ぶことにしたい。

iv 大津和夫「国際都市への発展」大分合同新聞（昭和二二年五月二〇日）

v General Headquarter /Supreme Commander for the Allied Powers

vi 当初は現在のパルコの場所にあった旧日銀大分支店に設置され、その後金池にあった教育会館へ移転

vii 大分工業文化部（現在の大分県立大分工業高等学校）発行の『黎明』（昭和二二年一二月発行）の編集者である田邉義信氏談

viii 拙稿「地方誌が奏でる〝東京行進曲〟」『占領期雑誌史料大系文学編Ⅲ』月報、岩波書店、二〇一〇年三月参照

ix ゴードン・w・プランゲ博士は一九一〇年七月一六日にアイオワ州に生まれ、一九三七年にアイオワ大学で博士号を取得したのち、すぐにメリーランド大学に職を得て、歴史の講義を担当した。戦争中は、大学に籍をおいたまま軍務につき、一九四五年に占領軍の一員として日本に赴任する。一時帰国したのち、GHQ参謀第二部（G2）戦史室長として一九四六年から一九五一年にかけて勤務している。「マッカーサー太平洋戦争報告書」を完成した。メリーランド大学に帰任してからは、一九八〇年に亡くなるまで教授として歴史学の講義を続ける。多くの著作を残したが、日本人にとっては真珠湾攻撃をテーマにし

た映画「トラ！トラ！トラ！」の原作者としてなじみがある。

x　二〇〇八年にホーンベイク図書館に移転

xi　Online Public Access Catalog の略。オンライン検索ができる図書館の蔵書検索システム。簡単な操作で膨大な数の蔵書の中から目的の書物を探し出すことができる。

xii　拙稿「プランゲ文庫に見る大分県の活字文化と検閲―地方誌は閉ざされた言語空間に囚われていたか」『インテリジェンス』第一〇号、二〇世紀メディア研究所、二〇〇八年において大分県で出された総合誌がいかに検閲制度と闘ったかについて検証を試みた。

本稿は、平成二二年五月一五日（於別府市中央公民館）に開催された別府史談会総会の記念講演での話に加筆したものである。

「大分プランゲ文庫の会」では大分で出された一一〇タイトルの雑誌の調査、報告を行っている。会の活動を記録した『大分プランゲ文庫の会記録』第一号（平成二〇年）、第二号（平成二二年）を刊行した。

参考文献

『大分県史 現代篇Ⅰ』大分県総務部総務課、一九九〇年
『大分県史 現代篇Ⅱ』大分県総務部総務課、一九九一年
「証言でつづる大分戦後五〇年1」小郷穆子、大分合同新聞、一九九五年八月一五日
『大分県の百年』豊田寛三他、山川出版社、一九八六年
「山口県史編纂とプランゲ文庫」『インテリジェンス』第三号、中司文男、二〇世紀メディア研究所、二〇〇三年